

時間メタファーの普遍性と相対性

—上下軸・前後軸・左右軸の競合をめぐる—

徐 蓮

1. 時間メタファーと空間軸の競合

認知意味論における時間メタファー論では、空間概念と時間概念という2つの異なる概念領域の間に構造的な対応関係が見出されることが指摘されてきた (Alverson 1994; Evans 2000, 2003; Fillmore 1997; Grady 1997; 国広 1997; Lakoff 1987, 1990; Lakoff & Johnson 1980, 1999; Moore 2000, 2001, 2002, 2004, 2006; Radden 1996; 瀬戸 1995, Shinohara 1997, 2002, 2002 a, b, 篠原 2007; 碓井 2002a, b; 山梨 1995, Yu 1998; ほか多数)。例えば、

- (1) 若いうちに 三時に寝る 出かけようとするところ
(2) 十年前 上半期 去年

時間へ拡張している空間は大きく場所 (1) と、方向 (2) に二分されている。(瀬戸, 1995) 方向の時間メタファーでは、上下・前後・左右と三つの空間軸の時間メタファーが多くの言語で報告されている。(英語: Lakoff & Johnson 1980; ハウサ語: Hill 他 1982; 鳥羽語・マダガスカル語: Dahl 1995; 日本語: 瀬戸 1995; 中国語: YU 1996; ドイツ語: Borneto 1996; ハワイ語: Cook 1996; ポーランド語: Dabrowska 1996; ほか多数) ただし、すべての空間軸が時間表現に活用されるわけではなく、また、メタファーとして利用されるときにも、同じ比重で用いられるわけでもない (瀬戸, 1995: 91)。つまり、時間メタファーにおいて、三つの軸の間に競合があるわけである。例えば、前後軸で表す日本語の「午前—午後」は中国語で主に上下軸の「上午—下午」に呼応している。中国語にも「午前—午後」、日本語にも「上午—下午」という言い方があるが、使用頻度ははるかに低い。この〈morning—afternoon〉のケースにおいて、日本語では前後軸、中国語では上下軸が競合で優位に立つ。

2. 先行研究と残された問題

空間軸の間の競合について、日本語と中国語の場

合、左右軸の時間メタファーはほとんど論じられておらず、前後軸と上下軸をめぐる、先行研究が三つの説に分けられている。

一つは前後軸主流説である。この説は主に日本語の研究で見られる。瀬戸 (1995)、左 (2007) は日本語の時間メタファーにおいて、「前後と上下では、前後の軸の方がはるかに重要性が高い」と判断している。

二番目は上下主流説である。この説の支持者は主に日中対照研究者である。宮 (2009: 49)、徐 (2009: 49) は中国語には日本語と逆で、前後より上下で時間を表す傾向があるとしている。証拠として、日本語の多くの前後の時間メタファーは中国語では上下で表されることが挙げられている。例えば (徐 2009)、

- (3) 前学期 (上学期) — 来学期 (下学期)
試合の前半 (上半场) — 後半 (下半场)
前世紀 (上个世纪) — 来世紀 (下个世纪)
先週 (上周) — 来週 (下周)
先々週 (上上周) — 再来週 (下下周) …

三番目の説は等分説である。藍 (2005) は中国語の時間メタファーにおいて、前後軸と上下軸はほぼ同じく活躍していると指摘している。

以上述べたように、空間軸の間の競合について、現在まだ定説がない。先行研究に次の二つの問題点があるからである。

①これまでの結論はあくまで研究者の内省に依拠しており、実証的な証拠はまだない。

②左右軸の時間メタファーについての先行研究がいまだに空白状態である。直感的に例が思い出せないが、考察しなければ、断言できない。

このため、次の課題が残されている。

①時間メタファーにおいては、日本語と中国語では、各空間軸が平均的に拡張しているのか、あるいは、ある空間軸が特に多く用いられる傾向があるか。

②傾向があるとしたら、上下軸・前後軸・左右軸はどんな順位で並んでいるか。

③日本語と中国語の空間軸の競合順位と比率は一致しているか。空間軸の競合にはどんな普遍性と相対性があるか。

3. 本稿の立場と方法

本稿では、日本語と中国語における上下・前後・左右の時間メタファーを比較し、空間軸の間の競合を考察する。研究課題は次の二つある。

①日本語と中国語の時間メタファーにおいて、上下・前後・左右と三つの空間軸の間の競合状況を考察し、競合順位を明らかにする。

②両言語の空間軸の競合状況を比較し、その間の普遍性と相対性を求める。

先行研究に基づき、次の仮説がたてられる。

①時間メタファーにおいて、日中両言語とも前後軸が多用されている。次は上下軸で、最後は左右軸である。

②全体的な競合の順位は両言語で共通している。しかし、日本語において、前後と上下の間の差は中国語より著しい。また、時代・言語・ケースによって、競合の順位が異なることもある。

競合の程度を測る基準として、本稿では造語力と使用頻度を使用する。造語力とは、空間的要素でどれだけ時間を表す語彙を構成できるのかということである。使用頻度とは、ある空間軸の時間メタファーがどれだけ使われているかということである。

ただし、本稿で取り扱う時間メタファーは<上/下><前/後><左/右>という形態素を含む表現に限られている。「先・くる・いく・すぎる・ゆく・遡る」「先、来、去、过、往、回溯」など、意味上で空間軸に関わる表現は今後の課題とする。なお、「歴史上の壮挙」、「五岁上死了父亲」、「晚上」、「一路上」などの表現は空間軸の競合には関係がないため、研究対象から除外する。

4. 造語力の面での考察

造語力は競合での競争力を測る重要な指標である。空間的要素による複合語が多ければ多いほど、その競争力が強いことが推測される。本稿では、『日中中日辞典』（小学館、CD-ROM版）に基づき、時間を表す前後・上下・左右の複合語を統計した。結果は次の通りである。括弧の中はこの空間要素による

時間を表す複合語の数が複合語総数におけるパーセンテージである。

表1 上下・前後・左右の造語力

空間要素	上	下	前	後	左	右
日本語	12(4.2)	9(4.6)	82(65.1)	83(62.4)	0(0.0)	0(0.0)
中国語	30(8.9)	28(9.5)	80(54.1)	93(65.0)	0(0.0)	0(0.0)

上の表から次のことが分かる。

①日中両言語の時間メタファーにおいて、空間軸が平均的に用いられるわけではなく、著しい競合が見られる。

②前後軸・上下軸・左右軸において、両言語とも前後軸が一番多用されている。次は上下軸で、左右軸を用いる時間メタファーがない。

③日本語では、前後と上下の間の差が中国語より著しい。

上に述べた日本語の前後の時間メタファーと中国語の上下の対応現象について、左（2007）は、漢語の場合、日本語は中国語と同じく上下で時間を表すが、和語の場合、日本語は前後軸を使うと述べており、中国から伝わってきた漢語が日本人の生活に深い影響を与えると同時に、中国人の時間の捉え方も日本人の考え方の一部として定着したと主張している。

左（2007）によれば、日本人はそもそも前後で時間を捉えていたが、中国人の上下で捉える影響を受けて初めて上下で捉えるようになったわけである。左（2007）の説に疑問を抱き、日本語の前後・上下の時間メタファーの読み方について一歩進んで調査を行った。結果が次の通りである。

表2 日本語の上下・前後の時間メタファーの読み方

	漢語	和語
上	9 (じょう)	3 (かみ)
下	3 (か・げ)	6 (くだす・さげる・しも)
前	61 (ぜん)	21 (まえ)
後	55 (こう・ご)	28 (あと・うわ・のち)

上の表から、前後の時間メタファーにおいて、漢語が和語をはるかに上回る傾向が明らかになった。日本語の従来固有の捉え方に、中国語からの影響も強いことが分かる。しかし、上下の時間メタファーは語彙数がとても少ないため、影響があると断言はできない。ただし、和語が9つもあることから、そもそも日本語では上下で時間を捉える考え方がなかったという左（2007）の説に反論の余地があると思われる。

5. 使用頻度の面での考察

いくら造語力があっても、作られた語彙がまれにしか使われていなければ、実質上日常言語から離れ、優位に立つ空間軸とは言えない。したがって、使用頻度の高低も競合程度を測る重要な指標である。上下・前後・左右の時間メタファーの使用頻度を考察するには、中日対訳コーパス¹の文学作品2篇から、上下・前後・左右の表現を全部抽出し、時間メタファーの割合をみる。結果が次の通りである。数字はこのメタファーが時間のメタファー全体で占めるパーセンテージである。

表3 時間メタファーの使用頻度

言語	上	下	前	後	左	右
日本語	1.9	1.9	53.5	42.6	0.0	0.0
中国語	10.9	10.6	24.6	53.8	0.0	0.0

上の表から、次のようなことが分かる。

① 日中両言語の時間メタファーにおいて、空間軸が平均的に用いられるわけではなく、著しい競合が見られる。

② 前後軸・上下軸・左右軸において、両言語とも前後軸が一番多用されている。次は上下軸で、左右軸を用いる時間メタファーがない。

③ 日本語では、前後と上下の間の差が中国語より著しい

まとめ：以上の造語力と使用頻度についての考察をまとめると、空間軸の競合順位が両言語において共通していると言える。しかし、その競合の順位はいつまでも変わらず続くわけではない。また、どの言語、どのケースにも当てはめられるわけではない。つまり、通言語的普遍性の反面に、適用できない相対性もある。

6. 空間軸競合の相対性

6.1 時代による相対性

空間軸の競合がたえず変わりつつあり、絶対的な順位はない。これまで論じた競合はあくまでも空間軸の競合の流れにおける切断面にすぎない。競合の順位に通時的な変遷があると推測される。

中国語の“上午—下午/午前—午後”の間の競合がまさにその証拠である。通時的考察（肖・刘2002）によれば、“午前—午後”の言い方が唐の時代よりさきにすでに使われていた。一方、“上午—

下午”が清の時代になって初めて現れた。つまり、上下軸が使われなかった時代では、〈morning—afternoon〉の概念を表すには前後軸を使うほかなかった。しかし、現代中国語の“上午—下午/午前—午後”の使用頻度を中日対訳コーパスで調べた結果、次の表になる。

表4 “上午—下午/午前—午後”の使用頻度

調査対象	上午	下午	午前	午後
使用頻度	101	221	3	41

上の表から分かるように、四つの調査対象において、上下軸の使用頻度をはるかに前後軸を上回っている。つまり、優位を占めていた前後軸は時代の流れに従って上下軸に取って代わられた。

日本語の「上半期—下半期/前半期—後半期」における上下と前後の競合を例にとってみる。BCCWJ 均衡コーパス(2009 モニター版)で上記の表現を抽出し、時代別に整理すると、次の図が得られる。

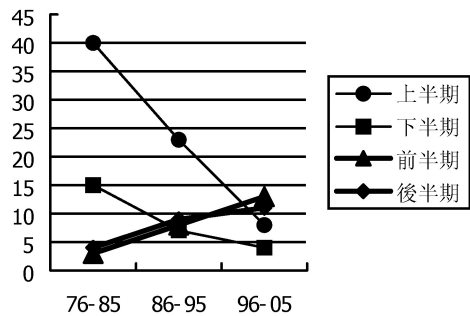


図1 上-下半期と前-後半期の使用頻度の変遷

上の図からはっきり示されるように、「～半期」の上下・前後軸の競合では、時代の流れに従って、上下が下火になりつつあり、前後がだんだん優位をとり、1996年—2005年の期間では上下を上回るようになった。このことから空間軸の競合順位は時代の流れに従って変化しつつあることが分かる。

6.2 言語による相対性

<上午—下午/午前—午後>と<上述—下述/前述—後述>は日本語と中国語の辞書で併存しているが、実際の使用頻度からみれば、上下と前後の競合状況は両言語の間で相違が見られる。中日対訳コーパスで、上の表現を調べた結果は次の通りである。

表5 <~述>と<~午/午~>の使用頻度

調査対象	言語	上	下	前	後	まとめ
~述	日	2	0	15	1	上下<前後
	中	149	8	2	0	上下>前後
~午/午~	日	0	0	56	189	上下<前後
	中	101	221	3	41	上下>前後

上の表から分かるように、日本語では、上下軸が前後軸を上回っている。それに対して、中国語では、上下軸より、前後軸の方が優位を占めている。両言語の間に競合順位の相対性が見られる。

6.3 ケースによる相対性

現代中国語の話題の上下・前後軸を併用している“上午—下午/午前—午後”類を例にとってみる。中日対訳コーパスで調べた結果が次の通りである。

表6 上下・前後軸を併用している時間メタファーの使用頻度

調査対象	上	下	前	後	まとめ
~午/午~	101	221	3	41	上下>前後
~(一个)月	7	7	0	0	上下>前後
~半年	14	20	0	0	上下>前後
~一年	11	1	0	0	上下>前後
~半生	0	0	5	7	上下<前後
~半夜	0	3	2	11	上下<前後

上の表から分かるように、各ケースにおいて、上下軸が優位に立ったり、前後軸が上回ったりして、競合の順位が異なっており、ケースの間に、競合順位の相対性が見られる。

7. まとめ

本稿では、造語力と使用頻度の面から、上下・前後・左右の三つの空間軸が時間メタファーにおける競合を考察した。その結果、次の結論が出される。

①時間メタファーにおいて、日中両言語とも前後軸が多用され、次は上下軸で、最後は左右軸である。

②全体的な競合の順位においては、両言語の間に通言語的な普遍性を見せている。

③競合の比率が両言語の間にずれがあり、日本語は前後と上下の差が著しい。また、時代・言語・ケースによって、競合の順位が異なることもある。つまり、競合の相対性が見られる。

これで瀬戸 (1995)、左 (2007) の前後主流説を

実証した。一方、前後主流はあくまでも全体的な傾向である。以上のことから、空間軸の競合は動的・相対的なものであり、いわゆる前後主流説も相対的な説であると言えるだろう。

今後の課題は主に三つある。

まず、競合現象の原因を求めなければならない。そもそも、なぜ一種類ではなく、様々な空間軸を用いて時間を理解するのか。上下軸と前後軸では、概念化される時間の性質が異なるのではないか。

それから、空間軸が選択される基準も明らかにする必要がある。なぜ日本語と中国語では、時間メタファーの分布が異なるのか。この分布の異なりが偶然でないとしたら、どのような動機付けによって、異なる分布ができるのか。

最後に、本稿では日本語と中国語の両言語において普遍的な空間軸の競合状況を明らかにしたが、その結論を他言語で検証することが必要だと考えられる。

注

1. 日本語と中国語における書き言葉対訳コーパスで、データが小説、エッセイ、伝記、政治評論・白書、法律関連文書・条約文書、詩など多くのジャンルにわたり、両言語の書き言葉の実態をある程度反映できる。

参考文献

- 宮雪 (2009) 『中日方位語についての対照研究』大連海事大学日本語科修士論文
- 左咏梅 (2007) 「『上』と『下』のメタファーについて」『杏林大学大学院論文集』No.4. 47-63.
- 篠原和子 (2006) 「空間認知実験と時間メタファー」山梨正明ほか編『認知言語学論考 NO.6』ひつじ書房.1-47.
- 徐蓮 他 (2009) 『言語行為の認知的・語用的研究』大众文艺出版社.1-49.
- 瀬戸賢一 (1995) 『空間のレトリック』海鳴社.84-101
- 藍純 (2005) 『認知言語学と隐喻研究』外语教学与研究出版社.145.
- 肖双荣・刘振岗 (2002) <汉语时间概念的空间隐喻系统>《湖南经济管理干部学院学报》第2期.
- 徐莲 (2008) <汉日上下时空隐喻比较研究>《日语学习与研究》第5期